CALENDAR 七月 第40回

歳時世相篇

祖先とともに過ごす夏

中国雲南省ペー族の場合

横山廣子（よこやまひろこ）
民博 民族社会研究部

お盆は、正月と並んで重要な年中行事である。
中国大陸でも同類の伝統行事がおこなわれてきたが、
現在の中国では、新年を祝う「春節」と比肩するほどの存在感は、一般にはない。
そんななか、雲南省の少数民族、ペー（白）族は、毎年、家族・親族や近隣との絆を深め、
亡くなった人びとと交流する夏のひとときを大事に過ごす。

人びとの絆の更新

その季節は旧暦六月二五日の松明（たいまつ）祭りから始まる。人びとは地域ごとに力を合わせ、一〇メートルもの松明をつくる。芯になる木に麦藁（むぎわら）や篠（しの）竹（だけ）を巻き、普通の年は一二、閏月（うるうづき）のある年は一三の輪で留めつける。男たちが三方向から綱を引いて松明を立てる。日暮れに点火。人びとは落ちてくる火の粉をあびながら松明の周囲をまわり、一年の息災を祈る。

松明祭りは、年に二回の年越しがあったことに由来するともいわれ、町で働いている者も休みをとって村に戻って来る。伝統的に、嫁いだ女性は実家に戻って夕食の卓を囲んできた。地域や家族の人びとの結びつきが再確認される祭りといえよう。

次の世代への願いをこめて

松明祭りではときを超える人びとのタテの繋（つなが）りも意識される。長老が地域を代表して祈りを捧げ、最後の宴（うたげ）には高齢者全員が招待される。他方、次代を担う子どもの誕生に向けた願いも、こめられる。

松明につける枡（ます）が三つ連なった紙飾りは、子宝を授ける縁起物で、以前は子どものいない男たちが奪い合ったり、子どもを望む家族に贈られたりした。また、松明用の麦藁や篠竹は、その年に子どもが誕生した家から提供するのが習わしであった。しかし、それは一九八〇年代ごろまでのこと。現在、人びとは、枡飾りはもう贈れないと口ぐちにいう。

中国では七〇年代末から厳しい一人っ子政策が始まった。避妊とともに不妊や出産全般に関する科学知識が普及し、特に農村では変化が著しかった。枡飾りの霊験を無邪気に語れなくなったのである。

しかし、数年前、新しい枡飾りの送り先が急浮上した。大学合格者を出した家に、祝いとして贈られたのである。もらう側は、子宝を予祝する意味のあった当時と同様、贈呈に参上した人びとらを簡単にもてなした。だが、それは長続きしなかった。大学合格者が年々増加し、九月の新学期前の夏にあらためて入学の祝宴をするのが一般化し、盛大さもエスカレートしてきたからだと思われる。全国的にも農村を中心にその傾向が高まっているが、雲南のペー族の場合、数十卓、数百人の祝宴もある。

農村と都市とで戸籍が区別される中国では、大学生は一旦、農村戸籍を離れ、卒業後は就職先の戸籍に入る。農村の親子にとって大学入学は、単なるひとつの旅立ち以上の重みがある。さらに最近は学費や生活費の高騰で、親の経済的負担が増している。親族や友人からの祝い金は、その一助にもなり、合格祝いの宴は、あらたな夏の風物詩になっている。

一足早く家からあの世に戻る「新仏（にいぼとけ）」に捧げる冥衣と紙銭を火にくべる人びと（2010年撮影）

祖先を迎え、送る

旧暦七月一日、家々では普段は二階に置いてある祖先の位牌（いはい）を階下に降ろし、花や果物を供える。夕食ができると、ご馳走（ちそう）をお盆に載せて門の外まで運び、冥界でのお金となる「紙銭（しせん）」を燃やして、祖先を迎える。以後、旧暦七月一四日の晩に見送るまで、食事は毎回、まず祖先に献げられる。数日おきに、紙でつくった「冥衣（めいい）」も燃やされる。亡くなって一年以内の故人は特別に扱い、白い喪の装束を着て迎え、送るときは一般の祖先よりも一日から数日早く、親族友人を招待して、多くの紙銭と冥衣を燃やして盛大におこなう。

これらの祖先祭祀活動は、道具立ても含めて基本的には、漢族からはいった「中元節」である。香港でよく見る現代風ファッションの冥衣や紙幣そっくりの紙銭は、ペー族にも流入している。しかし、その一方で、ペー族に特有の展開もある。祖先の位牌がその一例で、歴代祖先の名を一枚の板に記し、家型厨子（ずし）に納めている。ペー族の建築や木彫の技術は、雲南省では漢族をしのぐレベルで、それが美しい家型厨子にいかんなく発揮されている。以前は裕福な家に限られたが、経済状況が良くなった今、続々と家型厨子つきの位牌が買い求められている。一〇〇〇元前後から一万元くらいまで（一元は約一三円）いろいろなタイプが売られる。

親族集団単位の祖先祭祀が続けられているのも、ペー族の特徴である。一四日の晩の祖先送りでは、父系親族が合同でおこなう「焼包（スッパオ）」の活動が最重要である。この日は朝から親族内のある屋敷に皆が集まり、大量の紙銭とそれを納める紙の包みの用意を始める。当番が食材を購入し、集まった人びとの昼の支度をし、親族全体の晩のご馳走を調理する。各世帯のもち帰り用容器をところ狭しと並べて、料理ごとに分配が繰り返される様は圧巻である。夕食後、人びとは再結集し、贈られる祖先と贈る子孫の名前を読み上げながら、紙銭を入れた何百もの包みを、火に投入していく。

この数十年、中国では伝統的宗教儀礼の多くが「封建的迷信」として否定されてきた。ペー族の人びとも時代に合わせて伝統を変化させてきた。しかし、祖先と交流し、互いの絆を確認する夏の行事は、経済的豊かさとともにむしろ盛んになってきている。周辺に広がった住宅地では、松明を立てる地縁グループがあらたに組織された。村の民間僧は、松明祭りの前から中元節までの時期、新築の家に新しい祖先の位牌を安置する儀式のために、数軒を掛けもちで、忙しい日々を過ごしている。